

棹柳楫ハシ榮期客寓ハシ 置成立炭香烟霧 釣舟雖不失中流 媚一瓠千貫道具

〔後奈良院御撰何曾〕柚は皮ばかり

まろきもの

すみとり

すみとり

自在

〔書言字考節用集七器財〕自在ジ農家イ竈具今按

〔和漢三才圖會三十一〕中 煙略

按中 山家多不用竈而構大燧于席中每縫下一窠以為炊爨其繩設機升降自在故謂之自在

〔飛州志上〕器用類井名品

自在鈎 民間ノ圍爐裏ニ下テ鍋釜ヲカケル鈎也其上ノ鈎ハ椀ノ曲リヲ用イ中ノ竿ハ朴ヲ用

イ下ノ鈎ハ桑ノ曲リヲ以テ作ルヲ古法トスト云ヘリ來由未詳

〔鶉衣後篇拾遺〕自在鍵頌

世ニ自在鍵と呼ぶ物あり夫は爐上に下げて茶釜藥罐をつるすに延縮を心に任する物とぞ下

略

〔近世畸人傳四〕土肥二三

二三は俗稱土肥孫兵衛といふ中 後都の岡崎に住て自在軒といふ纒に膝を容る計なり

火宅とも云らで火宅にふらめくは直に自在の罐子也けり是より軒の名によびける

〔饅頭屋本節用集古〕火圍略

〔倭訓栞中編〕あんくわ 行火の義にやあんこともいふ袞毬をいふ被香爐とも稱す侯鯖録に

臥褥香爐とも見えたり

〔骨董集上編中〕火燧

火燧といふものは近古いできたるものなり火燧のなき以前は物に尻かけて火鉢にて足を煖

火圍